二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

小説 真慈真雄
挿絵 しなのゆら

序章 006
第一章 しのぶ先生の淫術試験 026
第二章 淫術実習開始・梓の放課後大暴走 058
第三章 悩める金髪優等生 097
第四章 毒ロリくノ一の襲撃 143
第五章 誘惑くのいち大乱交 192
終章 246

登場人物紹介

Characters

不知火(しらぬい) 梓(あずさ)

底抜けに明るい元気少女。運動能力に優れ、くノ一の実技ではトップの実力を持つ。直樹の従兄妹。

サヤ・シュタウフェン

ドイツからの留学生で、日本について偏った知識を持つ大和撫子。優等生で、梓のよき面倒見役。

葉隠(はがくれ) 五月(さつき)

幼い外見ながらプライドが高く、梓とサヤをライバル視している少女。本当は甘えたがりな性格。

風魔(ふうま) しのぶ

梓たちのクラスの担任教師。大人の雰囲気と大胆な忍び装束で見る者を虜にする。

不知火(しらぬい) 直樹(なおき)

教育実習で忍者養成学校へ来てしまった、ごく普通の青年。

『第一章　しのぶ先生の淫術試験』より

「こらこら、見るのはこっちだよ」
しのぶは小さくウィンクしながら、露出した乳房を自慢げに抱えてみせた。美女の腕の中で、溢れんばかりの巨乳が揺れている。
女教師のバストは、男性のロマンと野望が結晶になったような造形美を誇っていた。スイカのように大きく、プリンのように柔らかい。特にサイズは圧倒的で、とてもこれで忍者として動けるとは思えなかった。目測だが、九十センチは確実に超えているだろう。
普通これだけ胸が大きいと垂れてしまうものだが、よほど身体を鍛えているのか、垂れるどころか天を向いてツンと張っている。
少し大きめの乳輪に、やはり少し大きめの乳首。色素は余り沈着しておらず、美しい桜色だ。男性の本能として、直樹の視線は乳首に釘付けになってしまう。
湯上がりで上気した乳房は、ほんのり桜色に染まっていた。少し汗をかいているのか、女性特有の甘く優しい匂いが漂っている。
「お気に召したかな、私のおっぱいは」
「あ……」
絶句したまま、肌色の果実から目が離せない青年。お気に召すも何も、直樹は女性のバストを生で見るのは初めてだ。その圧倒的な存在感に、ただただ動揺していた。
そんな年下の男性に、しのぶは苦笑する。

「おやおや、少し意地悪をしすぎてしまったかな？　ちょっと反省して……」
そう言いながら、彼女はいきなり男根にのしかかってきた。
「もっと意地悪してあげよう♪」
ふにっ。柔らかく滑らかなモノが、ペニスを包み込む。それが女教師の乳房だと気づくのに、数秒かかった。
ふわふわと柔らかく、ひんやりと冷たい感触。それが青年のパイズリ初体験の感想だった。成熟した女性の乳肌は滑らかで優しくて、不思議と心が安らぐ。
「わっ……えっ……？」
パイズリなどという行為が存在することすら知らなかった青年は、その果てしなく柔らかい感触に心を奪われる。腰から下がとろけてしまいそうな満足感に、ただただ呆然とすることしかできない。
そんな直樹を尻目に、しのぶはどこからか取り出してきたローションを胸の谷間に垂らした。乳の狭間には青年の逸物が挟まれているはずなのだが、今は乳肉に埋もれてどこにも見えない。
とろり……。冷たいローションが豊かな乳房を滑り落ち、その滴りは直樹の肉棒へと染みわたっていく。ぬらつく粘液は乙女の肌と混じり合い、ねっとりとペニスを包み込んだ。
「果てたくなったら、構わないから好きなように出すといい。全部飲んであげるよ」

実に嬉しそうに言うと、女教師は左右から自分のバストを抱え込んだ。胸の谷間に埋没した男根を確かめるように、乳房を軽く揉みしだく。
「ふ……あぁ……」
それだけで感じてしまったのか、巨乳くノ一は頬を染めて目を潤ませた。無言のまま視線を上げて、それから自分の双球を抱えるようにして、ゆっくりと上下させ始めた。
ぬるっ……にゅっ……にゅるっ……！　透明な粘液にまみれた乳肉が、充血した肉棒を包んでしごき上げる。滑らかな肌は心地よい温もりと触感で、甘く優しくペニス全体を撫でていく。
「くはぁっ！　うっ……！　な、何を……っ!?」
自分の手で擦るのとは全く違う熱い快楽に、直樹は呻きながら身悶えた。
柔らかく、それでいて弾力に富んだ巨乳は、幹に浮かび上がった血管の一本一本を、あるいは大きく張り出した亀頭のエラを包み込んでいる。指とは比較にならないほど優しく、それでいて刺激的だ。
眼下では妙齢の美女が、忍び装束に身を包んだままでパイズリを続けている。戦闘と隠密のために作られたはずの短い着物は、扇情的に肌を露出させていた。しのぶの身体が動くたびに、脇の下やヘソがチラチラと垣間見える。
「うぉ……くっ、ああっ……！」

直樹の身体から、次第に力が抜けていく。全身の緊張が股間に吸い寄せられていくように、男性器だけはどんどん力強さを増していた。めくるめく快楽に頭が痺れ、全身が燃え立つように熱い。

「ふふふ、君の逸物は熱くて硬いね……いいよ、凄く……」

しのぶは額にうっすらと汗を浮かべながら、乳奉仕を続ける。上下の動きは次第に激しくなり、摩擦の刺激も強くなってきた。ぬちゃぬちゃという卑猥な音が、くノ一の胸の谷間から聞こえてくる。汗ばむ肌が忍び装束を吸いつけると、丸みを帯びたヒップやキュッと締まった腰が露わになってきた。

激しい動きに伴って、双球の隙間から赤黒く怒張した亀頭が姿を見せる。激しいピストン運動でもみくちゃにされたペニスは、ギンギンに張り詰めていた。

凶悪な形状をした勃起の先端を見つめて、女教師は蠱惑的に微笑む。

「嫌がりながらも、すっかり元気になってるじゃないか。身体は正直だね」

どっちが男かわからないが、彼女の囁きは蜜の沼のように甘く、そして男心を絡め取っていく。

清潔な石鹸の香りと、ほのかに混じる汗の匂い。濡れた髪と、ほんのり上気した肌。怜悧な瞳を熱情に潤ませ、美貌を朱に染めながら、年上の女性は深く心地よい声で囁く。

「君は本当に可愛いなあ。……もちろん、君のペニスもね」

そう言うと、しのぶはネットリとした動作で舌なめずりをする。そして微笑みを絶やさない唇を開き、ためらうことなく亀頭を口に含んだ。

――あむっ。男性器の先端が、乳房とは違う感触に覆われる。熱く濡れた粘膜が、亀頭粘膜に吸いつき、ざらつく舌がペニスの裏側に触れる。

「はうっ!?」

最も敏感な性感帯を襲った快感に、直樹は腰を震わせてのけぞった。灼けつくほどに甘美な刺激が腰椎を走り、心臓をわしづかみにする。ずくずくと肉棒が激しく脈打ち、先端からじわりと何かがにじみ出てくるのがわかった。

(こ、これ……もしかして、フェ、フェラチオってヤツか……?)

漫画や小説で見聞きしたことはあったが、実際にそんな性行為を体験するとは思わず、青年は激しい興奮を覚える。相手が教育実習の指導教官であることなど忘れてしまいそうなぐらい、口唇愛撫は心地よかった。

だが、それがほんの序曲に過ぎないことを、直樹は思い知ることになる。くノ一が舌と唇を使い始めたのだ。

「んっ……んむぅ……んん……っ」

艶めかしい声を漏らしながら、女教師は亀頭に舌を絡めていく。怒張したカリにたっぷりと唾液を塗り込め、先端の切れ込みをチロチロと舌先でくすぐる。

もちろん、乳房で奉仕することも忘れてはいない。こね上げるような動きで左右からペニスを包み込み、たっぷりとローションを垂らした巨乳でしごき立てる。

「うっ、くぉおっ……！」

繊細かつ淫靡な粘膜の動きに、直樹の腰がガクガク震える。幹をパイズリ奉仕され、亀頭を口淫奉仕される快感。眼下では、限界まで勃起したペニスに艶っぽい美女の唇が吸いついている。その中では今も、唾液まみれの舌と口腔粘膜が蠢いているのだ。

「んふ……んくぅ……んぅ……ぷはっ！　ふふ、口で吸ってもらうのは初めてみたいだね。ほら、もうこんなにひくひくしてる」

悪戯っぽい表情を浮かべたしのぶは、吐き出した亀頭のひくつきを見て薄く笑った。唾液でべとべとになった先端の切れ込みからは、じわりと先走りの汁が溢れ出していた。灼けるほどに熱く充血した亀頭は、早くも唾液が乾きかけている。

「さて、そろそろ一度射精してもらおうかな。久々に精液の味を楽しみたいから、遠慮なく口に出していいよ」

そう言うが早いか、淫乱くノ一は再びペニスにむしゃぶりついた。今度は先刻よりも力強い吸いつきで、尿道を吸い上げるようにして愛撫してくる。

「そっ、そんなにしたら……くうぅっ！」

尿道が真空状態になる快感に、直樹の頭の芯が痺れる。身体の奥から、何かがこみ上げ

てくるのがわかった。射精の予兆だ。
「んっ……あむっ、んふぅっ……んっ、んっ……！」
しのぶはオスの生殖液を求めて、なおも激しく亀頭を舐めしゃぶる。ざらりとした舌に唾液を絡めながら、亀頭のエラをねろりと舐め回した。特にペニスの裏側、尿道口のある辺りを執拗に舐めてくる。
直樹は肉棒の根元からこみ上げてくる熱い衝動を、必死になって堪えた。いくらなんでも、異性の口の中に精液を出していいはずがない。どこまでも生真面目な青年は、今にもはち切れそうなペニスを鎮めようと、括約筋に力を込める。
だが、そんな虚しい抵抗を嘲笑うかのように、くノ一教師の舌技は冴え渡る。舌端を尿道口に差し込みながら、同時に頭を上下させ、唇で亀頭をしごき始めた。ぴったりとすぼめた唇が、最も敏感な粘膜を容赦なく擦り立てる。
「んんぅっ……んっ、んむぅっ、ふぁっ……んうぅっ！」
ちゅうっ……ちゅぱっ……ぬちゅんっ！　卑猥な音を立てて頭を振りながら、しのぶはちゅうちゅうと尿道を吸い上げる。同時にバストの締めつけを強めて、根元から先端へとカウパー液を絞り出すように、激しくペニスをしごいた。
乳房と唇、それに舌先の三重奏。この強烈な責めに、経験の浅い直樹の逸物は素直に反応してしまう。みるみるうちに快楽のゲージが高まり、尿道の先へと熱く切ない塊がほと

ばしろうとする。
「ぐっ……うあぁっ、ふっ、うおっ！」
ぶるぶると腹筋を震わせて、なおも耐える若者。既に射精を我慢する忍耐は限界を超えていたが、それでも直樹は抵抗をやめない。
実際には溢れ出した白濁の汁が、ぽたぽたと美女の口中に溢れかかっている。だが、今の彼にはそこまで気づく余裕はない。
そんな男の抵抗に焦れたのか。直樹がふと気がつくと、しのぶが上目遣いに青年の瞳を見上げていた。オスの精子をねだるかのような、ねっとりと蠱惑的な瞳。少し恨みがましくもあり、同時に甘えるようでもある。彼女の瞳は、こう言っていた。
――ねえ、いつまでも我慢してないで、早く私の口にザーメンちょうだい。
くノ一の熱い視線が絡みついてきた瞬間、青年の胸中にゾクゾクと激しい興奮が渦巻いた。同時に強烈なバキュームフェラが尿道を襲い、ペニスの中にたっぷりと詰まっていた白濁をすすり上げる。
上気してローションまみれの乳肉が、男根を柔らかくしごき上げた。コリコリと勃起した乳首が幹を擦り、オスの性感帯をつつき回す。
「うっ、あ、ああっ!? だっ、だめだ、でるううっ!!」
とっさに直樹は口内射精を避けようと、腰を引く。逃がすまいとしのぶは青年の腰に抱

きついたが、それより早く射精が始まってしまった。
びゅっ、びゅるるっ！　びゅうぅっ！　びゅくびゅるびゅびゅっ!!
全身が性器になってしまったような高揚感の中、直樹は女教師の唇に熱い白濁液をぶちまけていた。身体の奥から勃起の先端へと駆け抜ける熱いほとばしりに、身も心も委ねる。
「あっ……あむっ！　……んっ、んうっ！　ん、んふぅ……！」
最初の射精を顔に受けてから、しのぶは放出を続けるペニスを咥えた。射精で敏感になっている逸物を巨乳でしごきながら、吐き出されるスペルマを口中に受け止めていく。
（だ……だめなのに……なんだ、気持ちいいっ……！）
直樹は気づいていなかったが、我慢に我慢を重ねた結果、絶頂感は凄まじいものになっていた。竜巻のようなエクスタシーが全身を包み込み、ザーメンは止まることを知らず大量に撒き散らされる。
びゅるぅっ、どびゅっ、とくんっ！　ぴゅるっ！　とくん、とくっ、ぴゅっ……。
射精は延々と続く。直樹が不安になり始めた頃になって、ようやく終息を迎えた。歓喜の嵐が遠くに去っていくのを感じながら、青年はぐったりと脱力する。
「は――っ……はっ、はぁっ……は――っ……はっ……ふっ……はあっ……」
長く不規則な息を吐きながら、直樹は霞む視界でしのぶを見つめた。
巨乳くノ一の整った顔には、濃いザーメンの塊がべっとりと貼りついていた。鼻筋から

『第三章　悩める金髪優等生』より

「え、ええと……これを、手でしごくんですか？」
「いや、しなくてもい……」
「そうそう。ギュッと握って、ゴシゴシ擦ってあげるんだ」
直樹が言うより早く、しのぶが生徒に手淫を指導する。女教師はサヤの手を取って、乙女の掌に灼けついた肉棒を握らせた。ぎこちなくペニスを握り締める指を、そっと包み込んでやる。
「こ……こうですか？」
「うん、そうそう……人差し指と親指で、輪を作って……うん、巧いね。さすがに優等生だけあって、呑み込みが早いな」
眼下で繰り広げられる、淫靡な実技指導。充血した男根を金髪美少女が握り、それを背後から巨乳くノ一が手伝ってやる。
直樹のペニスには、柔らかいサヤの指の感触。遠慮するように軽く握っているのを、しのぶが上から握って調節していた。
「さ、擦ってごらん」
担任の言葉に、くノ一委員長は無言でうなずく。そして真剣そのものの表情をして、ゆっくりと手を動かし始めた。
しゅ……しゅり……しゅっ……しゅ……。ゆっくりと、ぎこちない往復運動が始まる。

慣れない手つきの手淫は、自慰ほどの快感も得られない。はっきり言って、下手だ。
だが怒張した男性器を見つめる少女の眼差しは、ドキッとするほどに真剣で美しい。きゅっと唇を結び、極度に緊張している。それに、たどたどしい愛撫は新鮮味があり、なぜか男の心をくすぐるものがあった。
（こ、これはこれで、何だか気持ちいいな……）
そう思っていると、サヤが直樹を見上げながら、少し不安そうに訊ねてきた。
「不知火先生、どうですか……？」
「あ、ああ。気持ちいいよ」
青年が正直な感想を口にすると、金髪くノ一は露骨にほっとした表情を浮かべた。それから再び、真剣な眼差しで奉仕に集中する。
しゅっ、しゅっ、しゅっ、しゅっ……。次第に手淫の動きが滑らかになり、リズミカルに手が往復するようになってきた。ペニスの握り方も巧くなってきており、普通に気持ちいい。
「よしよし、もう大丈夫だ」
しのぶ先生は教え子の成長を確かめると、そっと指を離した。女教師の指が離れてもなお、サヤの手コキは衰えない。確かにもうすっかり、手淫奉仕のコツはつかんだようだ。
「頑張っている子には、ご褒美をあげないとな」

しのぶはそう言うと、離した手を少女の胸元へと持ってきた。サラシの中に手を突っ込んで、遠慮なく巨乳を握り締める。
「きゃっ⁉　せ、先生っ⁉」
サヤが驚いて悲鳴をあげたが、巨乳女教師は落ち着き払っている。サラシを少しずつ緩めながら、しのぶは教え子の乳房を揉みしだいた。
「いいから気にせず、愛しの不知火先生に御奉仕してろ。ほぅら、ここんとこが気持ちいいだろう？」
「やっ……やぁんっ！　風魔先生っ、やめっ……くふうぅっ！」
女同士だけに、感じるところがわかるのだろうか。それとも巨乳同士だからなのか、とにかく女教師の愛撫は的確にサヤの急所を責めているようだ。だんだん緩んでくるサラシの中で、女の指が乳首をつまみ、乳肉を複雑な動きで揉みしだいている。
うっすらと頬を染めながら、それでもくノ一少女は奉仕をやめない。唇を噛みながら、強く肉棒を握り締める。
一方、しのぶ先生は容赦なく教え子の乳房を責め続けていた。自分と同じぐらいある巨乳を、慣れた手つきで揉み潰し、つまみ、持ち上げ、こね回す。
「どう？　だんだん、切ない気分になってきただろう？」
「よっ、よく……わかりません……っ！　でもなんだかっ……はぁんっ！　かっ、身体が

熱いですぅっ！」

むっちりと官能的な身体をくねらせて、金髪ドイツ少女は喘ぐ。大人の階段を昇りきっていない、どこか未熟さを残したあどけない声だ。そのくせ、その声には潤みきった淫らな熱気が感じられた。

じっとりと汗を浮かべ、年上の同性に弄ばれる乙女。脇の下や胸元など、忍び装束のあちこちに汗の染みが広がってくる。汗ばんだ頬に貼りついた金髪が、艶めかしい。

汗でぬらついた巨乳は、白い布の内側で激しく動き回る。巧みな愛撫に酔わされて、ぬるぬると汗に濡れた素肌が光沢を放っていた。

「くっ、ふうううっ！　ひぃうっ！　くうううううっ！」

喘ぎ声が大きくなり、とっさにサヤはペニスを握っていた手を片方離して、その手で口元を覆った。くぐもった嬌声が、男根臭のする指の隙間から漏れ出る。

「だ、大丈夫？」

直樹は思わず心配になってしまったが、金髪の大和撫子は無言でうなずくだけだ。よほど胸で感じてしまっているらしく、目の焦点が合っていない。

しのぶの激しい愛撫によって、次第にサラシがほどけてくる。白い布が少しずつほどけ、サヤの豊かな乳房がチラチラと垣間見えた。上気して汗だくになったバストが少しずつ露わになってくるが、金髪くノ一は気づく余裕もないようだ。サラシの下で硬く尖った桜色

の乳首をつままれ、甘い悲鳴をあげている。
だがそれでも、サヤは手淫奉仕をやめなかった。残った片手で陰茎を握り、激しく擦り立てる。亀頭のエラが赤くなるほどに、ペニスをしごく。
しこしこしこしこしこ……っ！　カウパー液と少女の汗が入り交じり、強い匂いを放つ潤滑液となって肉棒を濡らす。滑らかなピストン運動のせいで、次第に青年の性感も高まってきた。
何よりも直樹を興奮させたのは、快楽に耐えながら奉仕を続けるサヤの姿だった。生真面目な金髪巨乳少女は手の甲を唇に押しつけて、はしたない声が漏れ出るのを懸命にこらえている。だが、感じてしまっているのは隠しようもなく、全身が汗だくだ。
太ももをぴっちりと包むスパッツは、汗の染みがどんどん大きくなっている。特に股間の辺りが最も濡れているが、あれは汗だけではないだろう。花蜜を吸い取ったナイロン生地は、てらてらと淫靡な光沢を放っていた。
「くふうぅ～っ！　ふぅんっ！　んうううぅっ！」
くぐもった嬌声が、次第に大きくなっていく。それに伴って、手淫も激しくなってきた。単に激しいだけではない。サヤはどうしたら男性器が最も感じるのか、文字通り手探りで試しながら奉仕している。粗雑でぎこちなかった動きは、次第に洗練された滑らかなものになっていた。

（男のチンポをしごくのに、こんなに一生懸命になってる……あんなに感じてフラフラになってるってのに……！）

優等生くノ一の一途でひたむきな奉仕に、男心が燃え上がってくる。目の前の少女が、たまらなく愛おしい。そして、犯したい。大事にしたいという愛情とメチャクチャにしてやりたいという欲望が、ごっちゃになって青年の胸を満たす。

興奮に伴って、肉棒は多量の先走りを漏らしていた。熱く異臭のする透明な汁が、サヤの手首から腕へと垂れていく。彼女が手を前後に動かすと、ニチャニチャという粘ついた音が響きわたった。

（さ、さすがにそろそろ限界かな……）

射精の欲望がこみ上げてきて、直樹は口を開こうとした。さすがにこのままだと、くノ一少女の顔や髪を汚してしまう。

と、そのとき、しのぶがサヤの耳元で何かを囁いた。

次の瞬間、巨乳少女は顔を真っ赤にする。だがやがて、意を決したように顔を上げた。

「ど、どうした？」

「あ、あのっ……はぁんっ！　わっ……私の……私のお顔に、その……」

背後から乳房を揉みしだかれながら、サヤは口を閉ざしてうつむいてしまう。だがすぐに、少女は再び顔を上げた。これ以上ないぐらいに激しく手を動かしながら、真剣そのも

のの表情で口を開く。
「私のお顔に、先生の濃くて熱いチンポ汁をドピュドピュして、思いっきり汚してくださいっ！」
「っ⁉」
恥じらいながら淫語を叫ぶ、金髪の大和撫子。淫蕩と清楚が同居した姿に、直樹の中で何かが激しく揺さぶられた。充血したペニスに詰め込まれていたザーメンが、奥から押し出されるようにして溢れてくる。
（あっ、出……！）
とっさに警告しようとしたが、口がこわばって動かなかった。それよりも早く、汗とカウパー液でぬかるんだサヤの手が、怒張した幹から精液を絞り出す。
「うっ、ぐうううぅ――っ⁉」
びゅくんっ、びゅびゅるっ‼　びゅっ！　びゅるびゅるびゅびゅびゅ――っ‼
亀頭の先端から、真っ白に濁った塊がほとばしった。長く尾を引く白濁液は、放物線を描いて幾度も少女めがけて放たれる。
「あっ……⁉」
サヤは少し驚いたような顔をしたが、スペルマシャワーを避けようとはしなかった。白人特有の美貌に、緩やかに流れる金髪に、露わになった巨乳に、煮詰めたゼリー状のザー

「あぉんっ……くはぅ……ふっ、あはぁっ……！」
鼻にかかった喘ぎ声を漏らして、梓は快楽を貪っていた。盛んにくねる細い腰が、外見に似合わず色っぽい。
「やらぁ……おかひく、なっちゃう……んふっ！」
サヤは巨乳を直樹の背中に押しつけながら、自身も悩ましい喘ぎ声をあげていた。ローションまみれの乳首はツンと尖り、青年の背中を擦りながらつつき回す。
「あっ……梓ちゃんっ、ふうぅっ……先生のオチンチン、気持ちいい？」
「うっ、うんっ……♪　なおきっ、にーちゃんのオチンチンも、サヤちゃんの腰もっ……ひゃうぅっ、五月ちゃんの舌もぉっ……あはぁうぅんっ♪」
ろれつの回らない舌で、梓がうわごとのように叫ぶ。髪を振り乱す痴態が艶めかしい。
「淫乱だなあ、梓は」
少女の蜜壺を掻き混ぜながら、しのぶが苦笑混じりに呟いた。教え子の直腸を貫く巨根に、ちゅぱちゅぱと淫らなキスマークをつけていく。
「そろそろ射精したいんじゃないか、直樹くん？　ほら、この辺りが……」
不意に陰嚢を揉まれ、青年の下半身にドクンという衝撃が走った。愛液まみれの指が、やわやわと玉袋を揉みしだいている。
精巣を刺激されて、実習生の股間が熱くなってきた。肉棒が鋼のように硬く怒張し、マ

グマのように熱い血液が海綿体に満ちていく。
「し、しのぶ先生……そんなに揉んだら……おぉっ！」
ぐ、ぐぐんっ！　精巣から搾り出された多量のザーメン。行き場を失った白濁液が、出口を求めて肉棒の幹を駆け昇る。
「うっ、ぐうぅっ……！」
堪えようのない射精の欲求に、直樹は呻く。男根は熱くとろけた少女のアナルに呑み込まれ、直腸粘膜の洗礼を浴びていた。括約筋の締めつけが尿道を圧迫し、煮えたぎったスペルマミルクを搾り出そうと暗躍している。
（く、くノ一って……恐い……）
彼女たちの淫術と性欲に、完全に屈服してしまった青年。だが同時に、めくるめく陶酔の中で言いしれぬ快感も味わっていた。
ビクビクと脈打つ巨根が、すっかりこなれてきた肛門を貫く。輪切りにされるかと思うほどの締めつけを振り切って、亀頭の先端がくノ一の直腸を叩く。
「も、もう出……っ、ぐうぅっ！」
行き場を失った精液が、早くもトロトロと溢れ出していた。直腸に漏れ出した白いカウパー液が、掻き混ぜられながら垂れてくる。
「あっ……ふぅんっ……じゃあ、最後は、んんっ……思いっきり、参りますね……！」

サヤが男の耳朶を甘噛みしながら、クスッと笑う。次の瞬間、おしとやかな外見からは想像もつかない荒々しさで腰を振り始めた。腰を重ねた直樹もまた、猛烈な勢いでアヌスを犯し始める。

「ひっ、あぁぁっ！　きゃふうっ！　ダメらよぉっ！　おっ、おしりぃっ、ユルユルに、なっひゃうぅ……っ！」

「そうなったら……あはぁっ、またお兄ちゃんに栓してもらえば……んふっ、いいのよ」

艶めかしく鼻にかかった嬌声を漏らしながら、五月が囁く。梓の痴態に興奮したのか、例の特大ディルドーで自分の蜜壺を犯していた。

小さなくノ一少女は、巨大な張り形を子宮の奥まで呑み込み、ずこずこと激しく往復させている。床には失禁したような愛液の染みができていた。ごつごつした疑似男根が出し入れされるたびに、薄い秘唇がめくれ返る。

サディスティックな優等生は、それでも同性を責めるのをやめない。唾液を垂らしながら、ねっとりと濡れた舌先で級友の膣を犯していた。

「ほうら、梓。はぁんっ！　こ、ここが弱いのよね？　ほらぁ、もっと感じなさい……よっ……んんぅっ！」

梓の秘裂に、五月の舌端が幾度も挿入される。そのたびにお気楽娘は甲高い悲鳴をあげ、肛門を収縮させた。ぎちぎちと強い締めつけに、青年の逸物が激しくしごき立てられる。

「ぐっ、おおぅっ、ぐううっ！」

チカチカと明滅する快楽の中で、直樹はくノ一たちに弄ばれる悦びに浸っていた。燃えるように熱い身体は、全てが男根になってしまったようだ。どこを触られても感じてしまう。

「あぁっ……せん、せいっ……！　す、好きです……はぁうぅっ！　んはぁっ！」

サヤも乳首を男の背中に擦りつけて快楽を貪る。想い人を抱き締める腕に、ぎゅっと力が込められる。恋する少女の汗ばむ肌が密着してきて、彼女の熱気と興奮を直樹に伝えていた。

「あはぁっ、ひぅんっ！　おっ、おしりぃ、やけちゃうぅっ！」

「はっ、早くっ、きゃふぅっ！　い、いっちゃいなさ……あぁんっ！」

「おっぱいが……あぁんっ、はうぅっ！　あっ、熱いですっ！　もっ、もうだめぇっ！」

肛門を貫かれて喘ぐ梓に、同性の性器を舐めながらディルドーオナニーに耽る五月。身体を密着させ、乳房の快感を貪るサヤ。くノ一三人娘の淫らな三重唱が、甘く切なく直樹の耳をくすぐる。

そんな青年の耳に、不良女教師の囁きが聞こえてきた。

「さあ、この子たちと一緒にイッてやれ。ふふ、これでトドメだ♪」

むにゅぅっ！　陰嚢が甘くソフトに揉みしだかれ、射精寸前の男性器に稲妻が走る。電

光は巨根の先端へと駆け抜けた。
「ううぉっ⁉　ぐううぅっ！」
ずんっ！　ほとんど同時に、サヤの腰がペニスを深々と埋没させる。直腸の襞に絡みつかれた亀頭が、灼けつく粘膜の刺激に悲鳴をあげた。
「うっ、ぐうあぁぁっ‼　ひうっ、あっ！　ううぅっ、くはぁぁぁぁぁぁ――っ‼」
びゅ――っ、びゅるるるるるうぅっ‼　びゅぶびゅるっ、びゅくびゅくどくんっ‼
泣き叫ぶような悲鳴と共に、実習生の巨根が射精する。腰が吹き飛ぶほどの快楽に意識を奪われつつ、直樹は従妹の腸内におびただしい量の精液を放った。
「あっ、あついいいぃっ！　やけ、ちゃっ……ひんっ、ひゃあああうううぅ――っ‼」
びくんびくんと肩を震わせながら、梓も同時に達した。煮詰めたように濃いザーメンミルクを直腸に注がれ、短い亜麻色の髪を振り乱してオルガスムスに酔う。
ほとんど重なるようにして、サヤと五月も果てる。
「あぁぁっ、オマ〇コ壊れちゃうぅっ！　ひぁあっ！　きゃふうううぅ――っ‼」
「わっ、私もっ、いっしょにぃっ！　あっ、もうっ、ひっ！　ひあああああぁ――っ‼」
ぷしいいぃっ！　梓の潮吹きを浴びながら、五月が身体を震わせて絶頂感に酔う。
サヤも力一杯直樹を抱き締めながら、巨乳を波打たせてびくびくと腰を震わせた。火傷しそうな体温と共に、青年の太ももに熱く濡れたものが伝う。エクスタシーと共に膀胱が

緩んだらしく、金髪優等生はまた失禁していた。
「ひゃっ、あぁあっ♪　あはぁっ、ひいいぅぅうんっ♪」
びゅぶっ、びちっ!!　放出された白濁は、直腸の壁に当たって内部で四方に飛び散った。跳ね返ったスペルマゼリーの一部は、結合部から外に押し出される。
「うっ、あむっ……んっ、んふぅっ……」
溢れ出した精液の塊を舐め取りながら、しのぶはうっとりと目を細めた。教え子の直腸から垂れてくる子種汁を、美味しそうにすすり上げる。
「あっ……あぁう……はぁっ……はぁっ……」
「くふぅっ、んっ……はぅう……」
サヤと五月が熱い吐息を漏らし、ゆっくりと床に崩れ落ちる。愛液と尿で濡れた床に、ロリータくノ一と巨乳くノ一の肢体が横たわった。汗と淫水と尿とザーメンを吸って、二人の忍び装束はぐちゃぐちゃになっている。
びゅううっ、びるっ!　びゅくびゅくっ、びゅるぅっ!!　ぢゅっ!
一方、直樹の射精は延々と続き、梓が失神してしまった後も彼女の腸内に精子を送り続けた。熱い塊が直腸粘膜にこびりつき、灼けた鋼鉄のような亀頭が腸壁を激しく擦り立てる。
「く、ふぅっ……♪」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/